

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学

所 属 人間科学部児童学科

名 前 紺野道子

作成日 2022年8月30日

1. 責務

東京都市大学人間科学部児童学科に所属し、教育・研究活動を行っている。主に保育士資格、幼稚園教諭免許取得に関する科目の中で、子どもの発達や心理関係の授業を担当している。保育士、幼稚園教諭として子どもとかかわる職につく学生だけでなく、将来自分の子どもを育てていく可能性のある学生たちには、自分の目で子どもを見て、正しい知識に基づいて子どもを理解し、考えに基づいて行動をすることの大切さを教えたいと考えている。専門分野は発達臨床心理学で、発達障害児のアセスメント、特性に合わせた個別治療教育について研究を行っているが、個別的な視点は普段の大学教育の中でも活かしている。

◆担当科目

- 1年生：基礎ゼミ、児童学入門
- 2年生：教育心理学、発達心理学(2)
- 3年生：教育相談、特別研究
- 4年生：臨床心理学、保育・教職実践演習、卒業研究
- 2年～4年生：子育て支援演習

◆授業以外の教育活動

- ・教務委員：時間割作成、オリエンテーション、学科授業方針の整理、履修モデル作成
- ・クラス担任：クラスの担任として個人面談、学生の状況把握を行っている
- ・子育て支援センター「ぴっぴ」運営委員

◆授業に関連する学外での教育・研究活動

- ・公認心理師、臨床心理士、臨床発達心理士、学校心理士として、週1回発達相談支援活動を実施

2. 理念

授業内容については保育・教育現場で使える実践的な内容を学生に提供すること、授業展開については個々の学生にとっての分かりやすさ、受講のしやすさを重視している。

◆授業内容について

人間科学部の学生の9割以上が保育士、幼稚園教諭の資格・免許を取得し、卒業後には約4分の3がそれらの資格・免許を必要とする仕事についている。つまり、学生は大学で学んだことをもとに卒業後すぐに保育のプロとしての仕事を行っていくことになる。保育士、教師として現場に立ったときに起こりうる様々なことに対処するためのスキルが必要になってくるが、その対処方法をHow-toとして身に着けるのではなく、自分で状況を読み取り、分析し、具体的な行動に移せるような、「How-toを編み出せる力」をもった人材を育てていきたいと考えている。そのために、ただ知識として習得させるのではなく、習った内容を実際の場面に当てはめて具体的に考える習慣、想像力を養っていきたいと考えている。また、授業で扱う内容が現在の保育・教育現場の状況と乖離しないように情報の更新に心がけている。

◆個々の学生の学びやすさに対応する

最近の大学教育ではディスカッションなどをしながら学ぶいわゆるアクティブラーニング型の授業が推奨されている。しかし、学生の中にはそのタイプの授業が性格的に苦手であったり、モチベーションの問題からディスカッションに参加せずに時間だけを過ごしている学生がいたりするなど、アクティブラーニング形式が授業内容や学生の特性によっては必ずしもプラスの効果として現れないこともあるのではないかと考えている。実際、自分自身が聴衆の立場で研修会等に参加するとき、ディスカッション等のない専門家の講義で、負担なく落ち着いて学ぶことができると実感することがある。クラスの中には、人と話しながら学びを深めていくことが適している学生もいれば、講義を聴きながら自分の中で考えを深めていく学生もいると考えられる。そのため、学習者のタイプによってやりやすい方法がとれる、複数の学び方が両立できるような授業を考えていきたいと考えている。

3. 方法

◆概要：保育・教育現場で起きている問題（問い）について具体的な方略を学生自身で考えていくことを基本にしつつ、その学びの過程は学生個人の学びやすさを選択できるある程度の自由度をもたせる。

◆方針1：授業内容を情報として記憶するだけではなく、実際に演習課題のなかで使ってみる体験を多くする

- ・方法1：授業に関連する小課題を授業の最後に毎回実施し、翌週の授業の最初に必ず解説。課題は、授業内容に関連した具体的な事例について、自分が保育者の立場としたときにどのように対応するかを具体的なセリフで回答するものを多く取り入れている。（資料1、資料2）
- ・方法2：授業中にも Zoom や WebClass などのチャット機能、アンケート機能などを用いて、全員の学生に自分の考えをまとめたり、書いて表現したりする時間を設ける。（資料1）
- ・方法3：学生が実習や就職先で体験することを踏まえ、常に最新の情報を提供するために、現職教員が多く参加している研修会に参加している。（資料3）

◆方針2：個々の学生にとっての分かりやすさ、受講のしやすさを重視

- ・方法1：発言や発表に参加しない（できない・苦手な）学生にも授業の中で考え表出をさせる機会を設けるため、考えたことを WebClass などに授業時間中に記入させている。これにより、授業内で一部の発言者だけではなく全員が自分の意見を書いて表現する時間を設けている。（資料1）
- ・方法2：個人で作業したい人、近くの人と話したい人などに対応できるよう、他人の邪魔にならない範囲で、自分が学びやすい方法をいろいろ試してみるようにアナウンスしている。また、書いた後にシェアし合うこと、回答を修正することは自由としている。
- ・方法3：オンラインでリアルタイムで回答させ、挙がった回答をその場で紹介し教員がコメントをする中で、多様な考え方、方向性について共有し合っている。（資料1）

◆方針3：配付資料を授業の予習、復習、授業中など学生個人の使いやすい時に活用させる

- ・方法1：授業のスライドを学生が手書きで写す作業を省き授業に集中できるようにするため、レジュメ

を前日までに配信している。(資料1)

- ・方法2:レジュメは、スライドをそのままではなく、授業中に必要に応じて加筆しながら説明を聞けるようにスライドとは別に作成している。教科書を指定した場合は、どのページが関連するかを明示し、学生の自主学習に活用できるようにしている。(資料2, 資料4)

4. 成果

◆授業評価アンケート

- ・3年生前期「教育相談」(資格必修、講義)では、5段階評定で受講者の平均が、授業内容の理解4.4、説明の分かりやすさ4.5、教材の適切な使用4.6だった。アンケートの自由記述には、「説明だけでなくDVDや演習もこまめに取り入れていて理解度が上がった」「具体例がありとても分かりやすく勉強になった」等が挙げられた。(資料5)
- ・4年生前期「臨床心理学」(選択科目、演習)では、授業内容の理解4.5、説明の分かりやすさ4.8、教材の適切な使用4.7だった。アンケートの自由記述には、「授業の内容が毎回プリントにまとめられていたのが分かりやすく良かった」「この科目を履修しなければ知らなかった子どもの発達段階を理解する方法を知れたり、支援の必要な子どもや保護者へのアプローチの仕方を考えたりすることができたため、選択だったが履修してよかった」等が挙げられた。(資料5)

◆授業見学者からのコメント

- ・3年生前期「教育相談」の授業を見学した教員から、発達障害の模擬体験ができる参加型の授業は学生にとって面白いと思うとのコメントをいただいた。

5. 目標

- ◆学生の多様な学びのタイプ(話して学ぶ、一人で考える、話す表現が得意、書く表現が得意など)に応じられる授業を実施。

◆短期目標

個々の学生の受講しやすい学習スタイルを探るために、1つの科目の中で複数の授業スタイルを意識的に取り入れ、学生の反応を収集ながら科目ごとに適した授業スタイルを考える。

- ・講義中心型の授業を聞いて、学んだことに基づいて課題に回答するスタイル
- ・課題についてディスカッションを行い、グループでの話し合いを全体へシェアするスタイル
- ・授業内での問いに対して、WebClass、Forms、チャットなどを用いて書いて表現し、その場で情報交換するスタイル
- ・次回の授業に向けて課題を提示し、先に課題に取り組んでから授業に臨むスタイル など。

◆長期的目標

各学生にとってやりやすい受講スタイルだけでなく、学生自身が苦手な授業スタイルの場合でも参加しようと思える働きかけ方、授業の展開の仕方について検討する。

【添付資料】

- 1) WebClass の配信教材、課題例、授業内課題への学生回答例
- 2) 時間割、シラバス
- 3) 臨床発達心理士・学校心理士等の研修会の参加証
- 4) 授業スライド
- 5) 授業評価アンケート